

カナダ初代首相ジョン・A・マクドナルド生誕 200 周年：

彼の功績と評価をめぐって

田 中 俊 弘

はじめに

私たちの初代首相サー・ジョン・A・マクドナルド(Sir John A. Macdonald)が、実務的 (practical) な男と自称していたのはよく知られている。彼は冗談めかして自らを単なる「内閣製造人(cabinet maker)」とさえ呼んでいた。彼は憲法上、政治上、あるいは法律上の高尚な理論をほとんど口にできなかった。その代わりに彼は、他の人々が哲学的に思索する傍らで、物事をやり遂げる男としての名声を高めていったのだ⁽¹⁾。

2015年1月9日の「ナショナル・ポスト」紙には、現カナダ首相スティーヴン・ハーパー (Stephen Harper) の特別寄稿が掲載された。彼は、初代首相の言葉を額面通りに受け取る歴史家が多すぎると批判し、マクドナルドの視野の大きさや、カナダの生成を可能にしたその理念を賞賛している。そして、「...もしも私たちがカナダ連邦の創設に彼が果たした役割を、理念を欠いた抜け目のない取引 (horse-trading) のように扱うのなら、それは自分の国をみくびっていることになる」と主張する⁽²⁾。

2002年に、彼の誕生日である1月11日が国民の祝日と定められたが⁽³⁾、生誕200周年に当たる今年は、各地でそれを祝うイベントが数多く行われた。ハーパー首相は、保守党の偉大なる先任者を讃えて演説し、マクドナルドの郷里キングストンで記念切手や記念コインの発表イベントにも参加した。そ

のキングストンでは、すでに2010年からこの祝賀のための非営利団体 (Sir John A. Macdonald Bicentennial Commission) が立ち上がって準備を進めており、その企画で、元オンタリオ州首相ボブ・レイ (Bob Rae) らを招いた討論会や花火大会などが行われた他、非営利演劇団体が、1月11日を中心に「マクドナルド週間」と銘打って演劇祭を開催した⁽⁴⁾。

1867年—日本の明治維新の1年前—に、英領北米植民地が連合してカナダ自治領が誕生した。それをカナダ史上では連邦結成 (Confederation) と呼ぶ。連邦結成には各植民地からあまりに多くの政治家が関わったため、「建国の父祖たち」は実に30人以上に及ぶが、なかでもマクドナルドの果たした役割の大きさは抜きん出ている。

それ以前に連合カナダ植民地(現オンタリオ州及びケベック州)で首相や主要閣僚を務め、連邦結成に向けた重要な会議で中心的な役割を果たしてカナダの初代首相となったマクドナルドの評価は、しかしながら、連邦結成それ自体の評価の難しさとも相まって、必ずしも一様ではない。国内には、200周年の祝賀に反対する声も少なからず上がっている。

本稿の目的は、そうした多様な声を整理して、マクドナルドの功績を再考する点にある。以下、まずは彼の生涯や人物像について紹介しながら、連邦結成や初期のカナダ史で彼の果たした役割を見直し、その上で、生誕200周年をめぐる議論からカナダが抱える問題の一端を描き出して、「ナショナル・ヒストリー」の在り方についても検討していきたい。

1. マクドナルド研究の系譜

初代首相の公的な伝記は、彼の私設秘書だったジョーゼフ・ポープ (Joseph Pope) の手で、1894年に刊行された⁽⁵⁾。1882年から1891年に首相が逝去するまで、最も身近な場所で仕えたポープは、生前のマクドナルドから「私の文学的な遺言執行人 (literary executor)」になって欲しいと頼まれたこともあり、マクドナルド夫人や S・E・ドーソン (S.E. Dawson) らからも「ほとんど息子も同然」の立場なのだからと懇願されて、その執筆・刊行を引き受け、ポープ自身によれば、同書は望外の好評を得た⁽⁶⁾。この2巻本は、政界入り以前については最小限の記述にとどめ、マクドナルド自身の手紙や文書を多数引用しながら、政治家としての活躍に焦点を当てている。また、巻末には彼の

演説や手紙などが多く補遺に掲載されているのも特徴的である。

初代首相の歴史的重要性と伝記研究が根付く国柄を考えればむしろ当然だが、多くの伝記がポーブに続いている。戦後カナダ史学界を牽引したローレンシア学派の泰斗ドナルド・クレイトン(Donald Creighton)にもマクドナルドを扱った2巻本の伝記(*John A. Macdonald: A Young Lion* [1952]; *John A. Macdonald: An Old Chieftain* [1955]、共に University of Toronto Press)がある。より最近では、「トロント・スター」紙の政治コラムニストとして著名なリチャード・グウィン(Richard Gwyn)にも2巻本の伝記(*John A.: The Man Who Made Us, Vol. 1: 1815-1867* [2008]; *Nation Maker—Sir John A. Macdonald: His Life, Our Times, Vol. 2-1867-1891* [2012]共に Random House Canada)がある。彼は、この著作でカナダ総督文学賞(ノンフィクション部門)をはじめ多くの賞を得ている。その他、私生活に焦点を当てたパトリシア・フェニックスの研究(Patricia Phenix, *Private Demons: The Tragic Personal Life of John A. Macdonald* [Toronto: McClelland & Stewart, 2006])も高く評価されている。生誕200周年を記念して、演説集(Sarah Katherine Gibson & Arthur Milnes eds., *Canada Transformed: The Speeches of Sir John A. Macdonald—A Bicentennial Celebration* [Toronto: McClelland & Stewart, 2014])が編まれるなど、カナダでは初代首相の人物像がいっそう明瞭になりつつある⁷⁾。

次節では、上記の文献も参照しながら、日本ではほとんど紹介すらされていない彼の生涯を概観する。

2. マクドナルドの生涯

コンフェデレーション期の英語系の政治家に珍しくないが、マクドナルドはカナダではなく英国で生まれた移民の子供である。1815年にスコットランドのグラスゴーで生まれたジョン少年が、両親に連れられて移住したのは、父親の商売の失敗が原因であった。父ヒュー・マクドナルド(Hugh Macdonald)の妻ヘレン(Heren)の親戚筋を頼ってアメリカ合衆国のジョージアに向かう可能性もあったが、別のついでで現カナダのキングストンを移住先に決めた。片や独立戦争で英国から袂を分かった国とはいえ、新大陸への移住を考える人々にとって、加米の境界はそれほど重要ではなく、むしろ血縁者のネットワークが重視されたに違いない。ジェド・マーティン(Ged Martin)が述べるよう

に、「ジョン・A は、カナダの連邦結成の父祖となる代わりに、アメリカ合衆国の南北戦争で南部連合に従軍して奴隷制を守るべく戦った可能性もあった」のだ⁽⁸⁾。

5 歳でカナダに移住したジョンは、兄ジェイムズの早逝後に親の期待を一身に集め、豊かとはいえない家庭環境ながら、10 歳からグラマースクールに入学してラテン語や数学の教育を受けた⁽⁹⁾。キングストンのエリートたちと共に学び、学問で頭角を表した彼は、新設のキングストン・アカデミーでも学ぶが、大学には進学しなかった。自活を始め、さらには父に代わって家計を支えなければならなかったからである。

1830 年に 15 歳にして父ヒューの親友ジョージ・マッケンジー(George Mackenzie)の家に下宿し、彼の法律事務所働き始めたマクドナルドは、すぐにその才覚を認められ、2 年後にはキングストンから西へ約 40 キロ離れたナバニーの事務所に派遣されることもあった⁽¹⁰⁾。1833 年には、まだ弁護士資格も持たないまま、親戚の L・P・マクファーソン(MacPherson)が国外に出るときにピクトン(ナバニーからさらに南西に約 30 キロ)で業務を代行するようになった⁽¹¹⁾。その後、1834 年にマッケンジーがコレラで亡くなると、彼の顧客を引き継ぐべくキングストンに戻り、弁護士資格を有する下限年齢の 21 歳を待たずに(おそらく生年を偽って)試験に合格して自らの事務所を開いた⁽¹²⁾。その後、若き有能な弁護士としての名声を得た彼は、1839 年にはミッドランド地区商業銀行の理事兼法律顧問に就任した⁽¹³⁾。同年に地元エリートの家系の 17 歳のアレグザンダー・キャンベル(Alexander Campbell)を後見指導し始めたが、そのキャンベルが以後の長きにわたってマクドナルドのビジネス・政治・選挙の重要なパートナーとなった⁽¹⁴⁾。

マクドナルドが植民地議会に初出馬初当選を果たしたのは、1843 年であった。英語系住民が圧倒的多数派を占めるアッパーカナダ植民地(現オンタリオ州の一部)と仏語系住民が圧倒的多数派のローワーカナダ植民地(現ケベック州の一部)が合同して、連合カナダ植民地が誕生した 2 年後である。以後、彼はキングストンを地盤として当選を重ねた。

保守党に所属した彼は、君主制を賞賛し、英国との紐帯維持を期待する保守穏健派であり、アメリカ合衆国に対しては脅威論を唱えていた⁽¹⁵⁾。同じアッパーカナダでも、フランス系を激しく批判して人口比例代議制(Rep by Pop: Representation by Population)を主張する改革派のジョージ・ブラウン(George

Brown)らとは大いに異なる立場を取っていた⁽¹⁶⁾。マクドナルドは、最初の妻イザベラ(Isabella)の長く重い病もあって議会の欠席も多かったし⁽¹⁷⁾、おそらくそのような家庭環境や父親からの遺伝も手伝って、飲酒に耽溺する様子を揶揄され続けたが⁽¹⁸⁾、それでも、徐々に政界での存在感を増していく。1850年代までには、彼は英系保守派を代表する政治家となった。1847年に歳入役を務めた後、司法長官などの閣僚経験を経て、1856年には、共同首相に就任している。共同首相とは、英仏系の植民地を合同して作られた連合カナダにおいて、両者のバランスを取るために編み出された役職であり、常に英系と仏系の代表がその座に就いていた⁽¹⁹⁾。

実際には、さまざまな配慮も虚しく英仏間の溝は埋まらず、連合カナダ植民地の政治状況は混乱を極めていた。同植民地が成立してから連邦結成を迎えるまでの26年間に、実に18もの内閣が成立と崩壊を繰り返し、重要法案さえ審議できない状況であったし、そもそも植民地首都さえ1ヶ所に定められず、トロントやモントリオールなど各都市の間を転々とする有様であった⁽²⁰⁾。他方、アメリカ合衆国では南北戦争が勃発し、イギリスが南部を支持したために、カナダは北軍の攻撃対象となる恐れが生じていた。そこに英領北米植民地間鉄道建設のアイデアが絡み、連邦結成による解決案が浮上してきた。より大きな植民地となって連合カナダ内の対立を周縁化するとともに、アメリカからの脅威に対抗する方策である。連合カナダ内では、改革派のブラウンが不倶戴天の敵だったマクドナルドとの大同団結に踏み切ったのが重要な一歩となった⁽²¹⁾。

1864年8月末、カナダ東部の沿海植民地での同盟交渉が開催される予定だったが、そこに連合カナダの代表としてマクドナルドやブラウンらが乗り込み、大同団結の重要性を説いて実現に至ったのが連邦結成であった。プリンス・エドワード島植民地の連邦参加は遅れ、現在でいうオンタリオ、ケベック、ニュー・ブランズウィック、ノヴァ・スコシアの4州のみからの門出とはいえ、英領北アメリカ法を憲法とする、新しい自治領が1867年7月に生成したのである。

この功績でマクドナルドは叙勲し、最初の選挙を待たずして、総督から初代首相に任命された。連邦結成の父祖の間には不満もみられた。英系である彼に爵位を与え、仏系の自分にはランクの劣るバス勲爵士(C.B)のみを与えようとしたのはケベックに対する侮辱とみなし、父祖の1人だったジョルジ

カナダ初代首相ジョン・A・マクドナルド生誕 200 周年:彼の功績と評価をめぐって(田中俊弘)

ユ・エチエン・カルチエ (George-Étienne Cartier) は、受勲を拒否した⁽²²⁾。マクドナルドの実力や重要性とは別に、イギリス本国の姿勢に英系優遇の意図があった点は否めない。とはいえ、彼はその後、この統治の難しい国の舵を取り、一旦は大陸横断鉄道敷設をめぐる収賄疑惑で政権を追われるも、その後再び首相に返り咲き、亡くなるその日まで計 19 年間その役割を果たした。首相在任期間は、戦間期のウィリアム・ライアン・マッケンジー・キング (William Lyon Mackenzie King) に次いで歴代 2 位ではあるが、連邦結成以前から首相を務めていたし、何よりも、この初代・第 3 代首相の下で、カナダは未曾有の発展を遂げた。ハドソン湾会社領土(ルパーツランド)を購入し、西部に版図を大きく拡大したのも、ブリティッシュ・コロンビア植民地を連邦に加えたのも、大陸国家を鉄道で結んだのも、すべてマクドナルド政権で実現した出来事であった⁽²³⁾。先に紹介したグインの著書のタイトルのとおり、彼はまさに「国家を作った男 (Nation Maker)」であった。ジャック・グラナッスティン (Jack Granatstein) とノーマン・ヒルマー (Norman Hillmer) は次のようにまとめている。

大長老 (The Grand Old Man) と人々は彼を呼ぶ。そしてサー・ジョン・A・マクドナルドは、カナダ首相の雛形を作ったのである。地域、宗教、階級、そして職業間の差異のバランスを取ったマクドナルドは、この御し難しい国を統治する方法を本能的に理解していた。意志の力と国家的な視野の強さによって彼はそれを機能させた。そして、一時の間、どれほど有能なトリックマスターに自分たちが導かれていたのかを、カナダ人は忘れていたのだ⁽²⁴⁾。

カナダ初代首相は、この国の統治形態の「マスタープラン」を作り出した人物であった。

3. マクドナルドの人物像

ここで、マクドナルドの人となりについて論じたい。彼の魅力や問題点、政治姿勢などについて、特徴を説明していく。

彼の最大の魅力は、快活さと演説のうまさだったようである。しかし実は、

彼は当初はそれほど議会で発言をするタイプの政治家ではなかった。のちにマクドナルド自身が懐古してポープに話したところによれば、最初の5回の会期中におそらく5回も口を開かなかった⁽²⁵⁾。それから徐々に演説機会が増えていくが、後にライバルとなる自由党のウィルフリッド・ローリエ (Wilfrid Laurier) のような流麗さではなく、選挙民に訴えかける率直な発言こそがその持ち味だった⁽²⁶⁾。

カナダを代表する児童文学『赤毛のアン』シリーズは、19世紀後半のプリンス・エドワード島を舞台にしており、名前は書かれていないが、あきらかにマクドナルド首相らしき人物が話に登場する。

「あら、総理大臣を見ていらした」すぐさまアンはきいた。「どんな顔の人？マリラ」

「そうさね。顔からいったらとても総理大臣になれる人じゃないね。まああの鼻といたら。けれど話は上手だね。わたし自分が保守党なのが得意だったよ⁽²⁷⁾。」

マーティンの著作は「醜いジョン(Ugly John)」と呼ばれていた初代首相の学生時代を紹介しているが⁽²⁸⁾、マリラのいう「あの鼻」は、その大きさだけの話ではあるまい。マクドナルドが弁舌の才能に恵まれていたのは間違いないが、彼はいくつもの問題を抱えた人物でもあり、アルコール依存もそうした問題の1つである。酒焼けした赤鼻は、風刺画などでやや誇張されすぎたきらいもあるが、その飲酒癖は—妻の病や長男の早生などの不遇を加味してもなお—度を越していた。マクドナルドもそれを隠すつもりすらなく、飲酒を批判されると、「ああ、しかし国民は酔っ払いのジョン・Aをシラフのジョージ・ブラウンよりも好いているのだ」と議会でも言い放っていた⁽²⁹⁾。トリステン・ホッパー (Tristin Hopper) は、逆説的に次のように説明する。

ディナー・パーティで言い争いになると姿を消し、何日も深酒をして、ほとんど話すことさえできないひどい状態で議場に登院する様子が何度も目撃されている。能力的に劣った男がそんな行動をすれば破滅していただろうが、カナダがマクドナルドの長年の飲酒に寛容であったこと自体が、彼がシラフの時にどれほど有能だったかを示す偉大な証拠である⁽³⁰⁾。

事実、カナダ国民は彼の飲酒を許し、彼を愛し、その長期政権にこの国を委ねたのである。

彼は連邦結成の直前の 1867 年 3 月にアグネス・バーナード (Agnes Bernard) と再婚し、2 年後には娘メアリー (Mary) を得るが、メアリーは水頭症を患っており、そのことが夫妻を苦しめた。パトリック・フェニックス (Patrick Phenix) は、「(妻とは) 対照的に、ジョン A はメアリーの病状についての個人的な苦しみを決して公にはしなかったが、彼女の誕生によって彼が精神的に強くならざるをえなかった兆候がみられた⁽³¹⁾」と説明している。私生活での困難を抱え、飲酒に溺れながらも、その苦しみを公にせず、明るくチャーミングに振舞っていたのだ⁽³²⁾。

メイティーフランス系と先住民の混血—の指導者だったルイ・リエル (Louis Riel) の反乱後、彼を処刑したことは、根強いマクドナルド批判の一因となっている。また、別の大きな問題として、利権との癒着もあげるべきであろう。政治家が企業などと密に結びついた「19 世紀的」行為という言い方も可能かもしれないが、彼は歴代首相のなかで、金銭スキャンダルで辞職した唯一の政治家であった。大陸横断鉄道の入札をめぐる配慮を条件に、1872 年に選挙資金を得ていたのが翌年に露見した、いわゆる「パシフィック・スキャンダル (Pacific Scandal)」が辞職の直接的原因である⁽³³⁾。しかし、酒と金銭スキャンダルを乗り越えて、彼は再び 1878 年に首相に返り咲いている。

理論や哲学よりも実践を重んじる人物というのが、本論の冒頭で紹介したハーパー首相のマクドナルド評であった。「自分の良心に反する、それが間違っているとわかっている行動を取ることはしばしばであった⁽³⁴⁾」という自身の発言もあり、実践的で柔軟な政治姿勢が評価されるマクドナルドだが、決して日和見的な政治家だったわけではない。政治信条や自ら思い描くカナダの将来像には忠実だった。すでに述べたとおり、マクドナルドは保守的な人間であったし、その姿勢は終生変わらなかった。連邦結成の父祖の 1 人、アレグザンダー・ゴルト (Alexander Galt) をして「マクドナルド以外に、未来について十分に考えていた人物は、私の知る限り (連邦結成を議論するロンドン会議の) 代表団の中にはいない⁽³⁵⁾」と言わしめた彼だが、本来は決して改革志向の政治家ではなかった。実際、彼が最後に当選した 1891 年選挙では、「古い旗、古い政策、古いリーダー (The Old Flag, the Old Policy, the Old Leader)」が

保守党のスローガンとなり、さらに彼は、「英国人として生まれ、英国人として死ぬ (A British subject I was born—a British subject I will die.)」という有名な発言をしている⁽³⁶⁾。興味深いことに、カナダはそのような保守的な指導者を中心に連邦結成という大革新を成し遂げ、大陸横断国家へと版図を拡大させたのだ。

マクドナルドが政治的に穏健な保守派だからといって、彼が穏やかな性格の人間だったわけではない。ユーモラスでチャーミングな日頃とは別に、率直な雄弁は時に激しい対立を生んだ。大連立を組むまで連合カナダ議会でライバル関係にあったブラウンとは、舌戦を繰り広げたし⁽³⁷⁾、1891年選挙では、ローリエ自由党に対して、政策だけではなく候補者の人格さえも批判し侮辱する攻撃を展開した⁽³⁸⁾。しかしそのローリエも、マクドナルドの死を追悼して次のように述べている。

彼を失って、私たちは参っている。私自身も、彼を失って参っている。この議会も同様だ。まるで本当にこの地の制度の1つが崩れ落ちたかのようだ。サー・ジョン・A・マクドナルドは、今や歴史的な存在となり、間違いなく、今閉じられたばかりのそのキャリアは、今世紀でもっとも顕著なものである⁽³⁹⁾。

政党も政治手法も異なる、そして時に激しく対立したライバルからこのような賛辞を得たマクドナルドは、間違いなくカナダで最も重要な政治家の1人であった。

4. マクドナルドの評価をめぐって

グインによる伝記は、「実に多くの意味で、カナダ人が成してきたことは彼から始まった。国家を作った男である彼が、我々を作ったのだ」という文章で結ばれている⁽⁴⁰⁾。カナダが今日抱える問題も含めて、この国の原型は初代首相にあるというのである。政治史家たちの多くは、この論調に賛同している。前述のグラナッスティンとヒルマーも、「間違いなく、マクドナルドはこの国でもっとも偉大な指導者の1人」だと断じた上で、「彼は、カナダがそれを必要としていた時の天才的指導者だった」と、その重要性を強調する⁽⁴¹⁾。

序のハーパー首相のコメントは、こうした政治史家や伝記作家たちの視点と軌を一にしている。

イヴ・ペルチエ(Yves Pelletier)は、その博士論文で、マクドナルドの「公的記憶」が変遷する過程を論じている⁽⁴²⁾。曰く、彼の死後間もなく、彼は連邦結成の父祖の中でも特別な存在として扱われるようになった。1920年代、連邦結成 50 周年の祝賀に合わせて、彼はさらに神格化され、マクドナルド没後 50 周年、連邦結成 100 周年をそれぞれの区切りに、彼は党派や民族を超えたカナダのシンボルへと昇華したのである。

今年の 1 月には、オタワのシンクタンクであるマクドナルド・ローリエ・インスティテュートのブライアン・クロウリー(Brian Lee Crowley) 総裁の記事が「オタワ・シティズン」紙に掲載された。彼は次のように主張している。

…彼は(単に)国家を望んでいただけではない。彼は、他のすべての国々を超越すると彼が信じる生き方が保持・促進できる国家を望んでいたのだ。それはすなわち社会に自由を取り入れることである。(彼が目指した)平和・秩序・良き統治は退屈な考えでも芸のない言葉でもない。それらは発展の源泉である。英領北アメリカ法によって約束された「英国のそれと原則において類似する」憲法は、個人の自由、政府権限の制約、司法の独立性、法による統治は、そして力強い市民社会の土台となっている。(1982 年憲法の権利と自由の)憲章がカナダに諸権利を導入したとみなす人々は、我々の土台となる諸制度にそれらが深く注入されている事実を理解できていない。そしてそれらの功績は主にマクドナルドに帰するのである⁽⁴³⁾。

しかし、生誕 200 周年を迎えた今年、マクドナルドの評価は二極化の様相を強めている。2年後の連邦結成 150 周年でも、彼を手放しに称賛するわけにはいくまい。それは、過去数十年間の歴史観の変化にも由来している。

この点について、200 周年記念マクドナルド演説集に編者のサラ・ギブソン(Sarah Gibson)が寄せた文章が象徴的である。彼女は、マクドナルドの重要性を強調しながらも、次のように述べる。

その時代の産物であったサー・ジョン・A は、完璧からほど遠かった。本書ですでにカナダの歴代首相たちが記したように、初代首相の先住民や中

国系カナダ人に関する演説を学ぶことで、私たち皆が過去の失敗から学び、より良い未来を創り出せるのである⁽⁴⁴⁾。

周年記念出版の序文に端的に表れているとおり、大酒飲みで金銭スキャンダルにもまみれたマクドナルドは、それ以上に、少数派の差別によって批判に晒されている。

現代的な倫理観で他の時代の人物評価をするのは必ずしも正しくない。少数派差別という点でも、彼はその時代において特別な存在だったわけではない。ともあれ、マクドナルドの当時の発言には、先住民に対して差別的な表現も多かった。また、西部に版図を拡大する際、大陸横断鉄道建設を急ぐマクドナルド政権は、先住民との「インディアン条約(第6条約)」で、飢餓に際しては食糧援助をする旨を約束していたにもかかわらず、それをせず、数千人単位の先住民の命を奪った⁽⁴⁵⁾。

先住民の母語や文明を否定し、親元から引き離して英語・仏語と西洋文明の教育を施す寄宿学校の開始に関わった首相としても批判される⁽⁴⁶⁾。「エドモントン・ジャーナル」紙に掲載された記事によれば、オンタリオ州ハミルトンではマクドナルド像の撤去を求める先住民団体の抗議運動が起きているのも道理で、彼らにとって初代首相は、大量虐殺の象徴なのだ⁽⁴⁷⁾。

また、中国人移民は、大陸横断鉄道建設の安価な労働力として歓迎されたが、1885年に鉄道が完成するとマクドナルド政府は掌を返して、彼らの入国を阻むべく人頭税を課すなどの施策をとった。たとえば選挙権についても、その年5月4日の下院で、彼は次のように述べている。

「インディアン」という語の後に「中国人の除外」という文言を挿入するよう提案したい。この修正について、長短いずれにせよ、議論の必要があるかどうか私にはわからない。中国人は、この土地の子供達であるインディアンとは異なる。彼らは外国からやってきた。そして、カナダのどの部分に定住するつもりもない。彼らはやってきて働き、商売をして、それに飽きたら、利益を手を去ってしまうのだ。加えて、彼らは国を代表する諸機関がどこかもわからない場所からやってきており、彼らに安心して選挙権を与えることなどできない⁽⁴⁸⁾。

そのような判断が当時のカナダではむしろ一般的だったとはいえ、時の首相の責任は重い。フランス系に対しては、「彼らを 1 つの国家として扱おう。そうすれば彼らは、自由な人民が普通にするように、寛容にふるまうだろう」と妥協と寛容を示したマクドナルドも⁽⁴⁹⁾、他のマイノリティには、違った振る舞い方しかできなかったのだ。

なお、ケベックでも、フランス系の血を引くリエルの処刑後は、マクドナルドの評価にも陰りが見られた⁽⁵⁰⁾。論争を産む判断は首相評に直接影響する。しかし、この事件については、国内で反乱を指導した人物に他にどのような対応がありえただろうか。その意味では、政治家の評価は、本人の資質と同等かそれ以上に世情の影響を受ける。

他にも、中央カナダ主導の連邦結成を地方の視点でどう評価するか、という議論もある。連邦結成は、果たして東部沿岸諸州や西岸のブリティッシュ・コロンビア州にとっても最良の道だったのだろうか。マクドナルド首相の再評価は、カナダ史の出発点を見つめ直す作業そのものなのである。

むすび

本論は、初代カナダ首相の人物像を概観した後、その生誕 200 周年に際して起きている議論を踏まえながら、マクドナルドの評価をめぐって論考を進めてきた。メディアには、カナダを作った英雄とみなす声と、先住民や中国系を差別した大酒飲みの腐敗政治家とみなす声が溢れる。本論中で紹介できたのは、そのごく一部にすぎない。こうした評価の二極化は、被支配者の経験に焦点が当たるようになった現代の歴史学の潮流を反映している。

かの国でも歴史離れは深刻である。カナダ人の歴史関心喚起を目指す非営利団体ヒストリカ・カナダ (Historica Canada) の依頼でリサーチ会社イプソス (Ipsos) が行ったアンケート調査の結果が、マクドナルド生誕 200 周年直前に発表されて話題を呼んでいる。曰く、カナダの連邦結成が 1867 年だと正しく特定できたのは 28% にすぎず、同様に、初代首相がマクドナルドだと回答できたのも 26% にすぎなかったのである⁽⁵¹⁾。移民国家カナダで、歴史が必ずしも国民の共通の過去として学ばれていない証かもしれない。

この徴候を「良いこと」だと真剣に考えるカナダ人は稀であろう。しかし、それでは、歴史家は過去をどのように提示すれば良いのだろうか。

かつて、グラナッスティンが1998年に刊行した『誰がカナダ史を殺したか？(Who Killed Canadian History?)』は、ナショナル・ヒストリーの重要性を説く政治史家の叫びとしてカナダで話題を呼び、そして多くの反論を招いた⁽⁵²⁾。筆者は、国民が誇りを持てる歴史に焦点を絞るべきとの彼の主張に必ずしも同調はしないが、もはや誰も英雄として描けない現状には疑問を抱く。

どの人物もそれぞれの時代の制約のなかにいる。それぞれ異なる価値観が支配する時代である。また、誤謬がない国家がないように、誤謬のない人物もない。時代背景や周辺化された人々の苦難を当然理解したうえで、しかし、国家の成り立ちや発展を描くナショナル・ヒストリーの視点も、おそらく欠くべきではあるまい。議論が紛糾しているマクドナルド生誕200周年の今年、歴史叙述のあり方自体を再考する好機を提供しているのだ。

注

- (1) “Stephen Harper reflects on Canada’s first prime minister, Sir John A. Macdonald,” *National Post*, January 9, 2015.
- (2) Ibid.
- (3) “Sir John A. Macdonald Day and the Sir Wilfrid Laurier Day Act” <<http://laws-lois.justice.gc.ca/eng/acts/S-10.4/page-1.html>>(2015年3月16日閲覧)
- (4) Sir John A. 2015 <www.sirjohna2015.ca>(2015年3月18日閲覧); “Events Mark Sir John A. Macdonald Bicentennial,” City of Kingston site <<https://www.cityofkingston.ca/-/events-mark-sir-john-a-macdonald-bicentennial>>(同左)
- (5) Joseph Pope, *Memoirs of the Right Honourable Sir John Alexander Macdonald, G.C.B.*, 2 vols., (Ottawa: J. Durie & Son, 1894).
- (6) Maurice Pope ed., *Public Servant: The Memoirs of Sir Joseph Pope*, (Toronto: Oxford University Press, 1960), 81-84, 103-04.
- (7) 帝国史研究者として高名なイギリスのジェド・マーティンの小編も、マクドナルドの問題点を描き出して示唆的である。Ged Martin, *John A. Macdonald: Canada’s First Prime Minister* (Toronto: Dundurn, 2013). また、歴代首相を紹介する類の書も一線級の研究者の手で刊行されてきた。代

表的なものとして、J.L. Granatstein and Norman Hillmer, *Prime Ministers: Ranking Canada's Leaders*, (Toronto: A Phyllis Bruce book, 1999)や Gordon Donaldson, *The Prime Ministers of Canada*, (Toronto: The Doubleday Canada Limited, 1994) などがある。20 世紀末を代表した 2 人の政治外交史家が編んだ前者で、マクドナルドは W・L・M・キングに次いで歴代 2 位にランキングされている。なお、日本では、歴史上の人物に焦点を当てた伝記的研究はほとんど存在しない。あえてあげれば、マクドナルドについては、木村和男の次の著作のなかに短いながらもよくまとまった説明がある。木村和男『連邦結成—カナダの試練』(日本放送出版協会、1991 年) なお、木村には連邦結成期を扱った他の論考も多くある。大原祐子や細川道久の研究も大いに参考になる。

- (8) Martin, *John A. Macdonald*, 19.
- (9) Ibid., 22.
- (10) Pope, *Memoirs of the Right Honourable Sir John Alexander Macdonald*, 6-7.
- (11) Ibid., 7.
- (12) マーティンは、「ジョン・A・マクドナルドの法律家としてのキャリアの最初の公的活動は、偽善だったようである。それは、もっとも安易な手段を取るのを少しも厭わなかった彼の後の生き方を予兆させるものだった」と説明している。Martin, *John A. Macdonald*, 26-27.
- (13) Ibid. 35-36.
- (14) Ibid.
- (15) Granatstein and Hillmer, *Prime Ministers*, 17-18.
- (16) 木村『連邦結成』、37-38 頁。
- (17) 体調を崩した妻のために、彼は 1844 年にはアメリカ合衆国コネチカットのニュー・ヘイヴンへ、そしてさらにジョージアのサヴァンナへ彼女を静養のために連れていった。イザベラはその後も長く合衆国に留まった。Patricia Phenix, *Private Demons: The Tragic Personal Life of John A. Macdonald* (Toronto: McClelland & Stewart, 2006), 64-65.
- (18) Ibid., 107; Martin, *John A. Macdonald*, 26-27.
- (19) 木村和男編『カナダ史』(山川出版社、1999 年)、163 頁。
- (20) 木村『連邦結成』、40-42 頁。
- (21) 同上、57-60 頁; 細川道久は、外因を過大評価する連邦結成史観を批判

し、「英米の圧力から連邦結成が促進されたというのは一面でしかなく、連合カナダ植民地内部の内発的・自律的な連邦結成運動の側面も見落とすべきではない」と論じて、ブラウンの改革派内の変化を丁寧に描きだしている。細川道久『カナダの自立と北大西洋世界：英米関係と民族問題』（刀水書房、2014年）、第2章（引用は65頁）。

- (22) Martin, John A. Macdonald, 110-11.
- (23) 大原祐子は、職業別の利害を超えて農民と製造工業者の協調による産業保護を唱え、それをナショナル・ポリシーの柱にした点でマクドナルドの功績が大きかったと論じている。大原「カナダにおける『ナショナル・ポリシー』の決定とジョン・A・マクドナルド」『史苑』112号、1973年、22頁。
- (24) Granatstein and Hillmer, *Prime Ministers*, 15.
- (25) Pope, *Memoirs of the Right Honourable Sir John Alexander Macdonald*, 41.
- (26) Sarah Katherine Gibson & Arthur Milnes eds., *Canada Transformed: The Speeches of Sir John A. Macdonald—A Bicentennial Celebration* (Toronto: McClelland & Stewart, 2014), xxvi, xxxix-xl.
- (27) ルーシー・モード・モンゴメリー著、村岡花子訳『赤毛のアン』（新潮文庫、1954年）、211頁。「レイチェルはむろん自由党だから、総理大臣には用なしさ」と続く。ちなみに、ギルバートは自由党支持であったが、マリラ同様にマッシューは保守党に投票するのが宗教と同じようになっていたという。同204頁。
- (28) Martin, John A. Macdonald, 24.
- (29) Richard Gwyn, *John A.: The Man Who Made Us, Vol. 1: 1815-1867* (Toronto: Random House Canada, 2008), 239.
- (30) Tritstin Hopper, “Everyone knows John A. Macdonald was a bit of a drunk, but it’s largely forgotten how hard he hit the bottle,” *National Post*, January 9, 2015.
- (31) Phenix, *Private Damons*, 198.
- (32) 木村『連邦結成』、33頁。
- (33) “Pacific Scandal,” *The Canadian Encyclopedia*
<<http://www.thecanadianencyclopedia.ca/en/article/pacific-scandal/>> (2015年3月26日閲覧)

- (34) Granatstein and Hillmer, *Prime Ministers*, 23.
- (35) Martin, *John A. Macdonald*, 109. なお、カナダ史では「アレキサンダー・ガルト」との日本語表記が一般化しているが、ゴルトの方が原音に近い。
- (36) Gwyn, *Nation Maker—Sir John A. Macdonald: His Life, Our Times, Vol. 2—1867-1891* (Toronto: Random House Canada, 2012), 563-64.
- (37) たとえば、1854 年 11 月 2 日のケベックシティでの議会で、ブラウンらを「極端で狂信的な政党(an extreme and fanatic party)」と呼んだ。Gibson & Milnes eds., *Canada Transformed*, 58. 犬猿の仲だったマクドナルドとブラウンが大同団結に踏み切ったのは、マクドナルドではなくブラウンの殊勲とみなすべきである。
- (38) Patricia K. Wood, “Defining ‘Canadian’: Anti-Americanism and Identity in Sir John A. Macdonald’s Nationalism,” *Journal of Canadian Studies*, 36(2), Summer 2001, 50.
- (39) ローリエが議会で行った追悼演説。Quoted in “Time to Honor Our National Hero,” *The Globe and Mail*, January 12, 2002
<<http://www.theglobeandmail.com/globe-debate/time-to-honour-a-national-hero/article752460/>>(2015 年 3 月 26 日閲覧)
- (40) Gwyn, *Nation Maker*, 592.
- (41) Granatstein and Hillmer, *Prime Ministers*, 27-28.
- (42) Yves Y. Pelletier, “The Old Chieftain’s New Image: Shaping the Public Memory of Sir John A. MacDonald in Ontario and Quebec, 1891-1967” (Ph.D Thesis, Queen’s University, 2010), 特に 291-292.
- (43) “Sir John A. Macdonald—an underrated statesman,” *The Ottawa Citizen*, January 3, 2015.
- (44) Gibson & Milnes eds., *Canada Transformed*, xxix-xxx.
- (45) “Why Sir John A. doesn’t deserve a celebration,” *Times – Colonist*, January 7, 2015.
- (46) “A legacy not entirely golden: Sir John A. Macdonald’s initiation of residential schools often overlooked,” *Edmonton Journal*, February 20, 2015.
- (47) Ibid.
- (48) House of Commons, *Debates*, May 4, 1885, quoted in Gibson & Milnes eds., *Canada Transformed*, 401-02.

- (49) “Sir John A.’s vision of unity is complete,” *The Globe and Mail*, January 13, 2015.
- (50) “Love for Sir John A. didn’t last in Quebec: After Riel’s hanging, the Old Chieftain was not welcome,” *Montreal Gazette*, January 13, 2015.
- (51) これは、1001人のインタビュー結果に基づき、人口構成など諸要素を鑑みて計算した結果である。
<<http://www.ipsos-na.com/news-polls/pressrelease.aspx?id=6617>> (2015年3月25日閲覧)
- (52) Granatstein, *Who Killed Canadian History?* (Toronto: Harper Collins Publisher Ltd., 1998). この書をめぐる議論については、かつて筆者は1999年2月6日に東京カナダ研究会(於明治大学)で、「J・L・グラナッステインのリビジョニズムとカナダ政治史における時代区分」と題して報告した。社会史家から総攻撃を浴びた本書は、歴史学の潮流を引き戻す力とはならなかったのである。